
彼は乙女系男子ではありません。

初花水色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼は乙女系男子ではありません。

【Nコード】

N7474V

【作者名】

初花水色

【あらすじ】

幼なじみの茉莉が大好きな新はずつと一緒にいたいと思うあまりに、女の子になれば一緒にいられると思ひ込み、乙女系男子という仮面をはめる事になる。しかし年頃になるにつれ、自分は判断を間違えたのではないかと思うのだが、茉莉にはゲイだと思われる。二セ乙女系男子と無表情天然少女の恋愛コメディ！

いち、一度はじめると、意外と止まらない。(前書き)

BLでは全くありません。

ただの勘違いが障壁となっているラブコメです。どうぞ。

いち、一度はじめると、意外と止まらない。

新は茉莉あらた まじりのことが大好きだった。ある日、男と女の違いを教えられるまでは、ずっと一緒にいられると思っていた。そこへ、我が子の茉莉溺愛ぶりを基本的人権の尊重に抵触しかねない勢いだと判断した新の母が、見かねて言った。

「中学になったら男子と女子は別々に授業をするのよ」

嘘だった。新は茉莉と同じ中学に入るが、そこは共学で男女比にも特に遜色のない、学校自体が何の遜色もない中学校だった。

「それにね、茉莉ちゃんはいつまでもあんたと一緒には居られないの。女の子は女の子同士で集まっておしゃべりするのが好きなの。そこにあんた一人男子がいたら迷惑なのよ」

小学校の学年をのぼるにつれ、新も薄々と気がついていったことだった。どうやら、男は男、女は女でグループを作るのが一般的らしい。鳥の親子みたいに幼稚園の先生にひよひよと着いて行けばそれでよかった幼稚園時代とは違い、小学生は自主性を求められた。その中の一つが同性同士で集まる習性を会得させたのだろう。

ところが新は違った。あからさまに侮蔑の目を向けられるくらいの年頃になっても、男子女子の区別なしに遊んでいられるものと信じ込み、いつまでたっても茉莉の傍から離れなかった。

「男子が居たら、迷惑なの……？」

母親がおとぎ話の魔女のように見えた。ひどいことばかり言う悪い魔女だ。けっして、シンデレラを舞踏会に連れて行ってくれるたぐいの魔女ではない。新を深淵まで導いて、そのまま出てこられなくするような声をしていた。

「まあ、近所だし、家に帰ってからくらいならいいんじゃないかしら。でもきつと、学校だと茉莉ちゃん、困るわ」

新が茉莉の傍にいと困る、というのか。少年の心は、ハリウッド映画のガラス窓のように壊れやすく弾け飛びやすい。自分がいる

と大好きな茉莉が困るといふのだ。どうしたらいいのか、新には分からなかった。ただ、茉莉が困るといつても新も困る、彼は幼なじみの隣りにいつもいたいのだから。

「でも、茉莉と一緒にいたいよ」

新の母親は微笑んだ。飼いだのペロがソファに粗相をした時に、数秒後には怒号が響き渡ったというのに微笑んだ、あの時みたいに。「それは無理ね。新が、女の子にでもならない限り、無理よ」

まだ少年の頃は生物学的に異性になる方法など知らなかった。その上、そろそろ男女の区別がついてきた子供には、母の言葉は全くその通りに思えた。

「残念ね、女の子に生まれてこれば茉莉ちゃんとずっと一緒にいられたのに」

頭の中がぐるぐるとした。ずっと小さい昔に、新は嫌だと言ったのに乗せられた遊園地のコーヒーカップの中に居るようだった。

女の子に生まれてきたかった。そうしたら、ずっと茉莉といわれたのに。

新の母親は、一つの可能性を完全に無視した上で子供を言い負かしていた。男と女がずっと一緒にいたいというのなら、結婚でもさせてやればよい。さすがにまだそれが可能な年ではないが、何も性別をかえなくともいずれば結婚、という道があったのだ。しかし新のあまりの視野の狭さに、母はもつと世界をよく見回した方がいいと考えていたのだ。茉莉は良い子だが、彼女だけが女の子じゃない。それに茉莉の母親はちよつと苦手だ。セレブの香りをさせて、同等の扱いをしてきている気はしてもどこか新の母を上の方から見ているような発言が多い。

そんな私情はさておき。とにかく母親は誤った選択肢を我が子に提示したのだが、残念ながらその時はまだ気がついていなかった。

彼らが高校に入ってからそう時間を必要とせずに、進藤新は乙女系男子だという噂が流れた。その真偽は、どちらであるにしろ彼はその噂を止めようとしなかった。

きっかけはこうだ。放課後の教室で新と、茉莉、その友人で話をしていた。

「ほんと二人って仲良いよね。もしかしてつきあってるの？」

年頃の女子というものは男と女が二人で立っていると、休日には手をつないで映画館や食事に出かけたりする仲だと思っらしい。新は固まった。自分と茉莉がそういう風に見られているという事実がうれしくもあつたが、それは真実ではなかったからどう答えていいのか分からなかった。

「違うよ。ただの幼なじみ」

茉莉は平然と答えた。彼女は感情の変化に著しく乏しい娘で、眉一つ動かさずにいた。

「でも誤解されるよお。ていうか、茉莉ちゃんに彼氏出来たらどうするの、それに……」

不躰な瞳を向けられて、新は茉莉の友人が古い歌を脳内で再生させているのではないかといぶかった。それは男は狼なのよという歌詞ではじまる古い古い歌だ。要するに彼女はいつまでも若い男女がつきあってもないのに行動ともにするなんて卑猥だわ、と言いたいのだ。新は茉莉の名誉のためにも断固として戦わねばならなかった。「大丈夫、こいつゲイだから」

茉莉はゲイとホモの違いを知っている娘だった。後者は蔑称的な意味合いが大きい。

「あー、その」

新は何か言おうとしたが、茉莉が先に彼を振り返った。

「あ、言っただ大丈夫だった？ 隠しておいた方がよかつたんだっけ」

中学生の頃に新の人生は自ら間違った方向へと進んでしまった。母親に言われた衝撃の事実を若い心は受け止めきれず、悩みに悩んだ末、新は自分を女の子になりたい男の子だと思おうようになった。そうすれば、ずっと茉莉と一緒に。男に興味はなかったが、とにかくそういうことになったからと茉莉に告げると、彼女はただ「そうなんだ」と頷いた。特に茉莉と同行できる時間が増えたように思えなかったが、極端に減ったようにも思えず、新は満足していた。そして中学時代はそのおかしな状態を保ち続け、クラス中に新は男好きだと思われて卒業した。

しかし、中学の半ばでおかしいと気づいた。当然、高校も茉莉と同じ学校を選んだが、果たしてこのままでいいのだろうか。新効果か茉莉は中学で異性と個人的なおつきあいをしているはこなかったものの、好きだと申し出る男子がいなかったわけでもない。そう、新は何かが違うと勘付きはじめたのだ。精一杯の気持ちを伝えようとする茉莉好きの男子たちは、玉砕してもなんだか満足そうに見えたのだ。それどころかいつしか新の気持ちに気がついた友人の一人が、顔に哀れみを浮かべたのだ。

何かがおかしい。新は、自分の判断は間違っていたのではないかと気づいたのだ。しかし、今さら止めることは難しいだろう。それに、茉莉は新しいことをすっかりゲイの女に興味がない人間で、むしろ女でありたいと思っている人物だから傍においているはずなのだ。この言い訳がないと新は茉莉と一緒にいられない。

どうしたらいいのかわからなかった。今更、余計なことを吹き込んだ母親を責めてもしかたがないし、同性同士で相談できる相手など天国に単身赴任してる父親や他人を信用せず皮肉ばかり口にする友人一人くらいしか思いつかず、どちらもいい相談役とは言いがたかった。苦肉の策は、新は心は女だけけど学校ではそれを隠したいと思っていると茉莉に打ち明けることだった。せめて高校では新しい自分で暮らしたい。問題を先延ばしにするだけの案で、本当はゲイじゃないんだと告げるべきだったのに、新は真実を捻じ曲げた

ままにしておいた。

そうして、結局は茉莉に高校生活もゲイとして暮らせと言われて
いるかのようなカミングアウトをされてしまうのだが、新はもはや
止めることなど出来ない場所にいるのだとさとった。

茉莉と新の通う高校は、常識や偏差値にとらわれない自由な校風
が売りの生徒に広く間口を開いた学校だったので、入学してくる新
入生たちもみな頭が柔軟で自由な思想を持っていたので、なるほど
と頷いた。

「ああ……乙女系男子」

茉莉の友人はそれでも言葉を和らげて表現した。

新は高校生活も茉莉の傍にいられると思ったのだが、そうはなら
ずに茉莉には恋人が出来てしまった。女子同士でも行なわれる「恋
人が出来ると友人をおろそかにする法則」が新にも適応され、新は
一人取り残されてしまった。

結局意味のないことなのだった。母親が提示してもない可能性を
勝手に引つ張り出しては実行し、それを継続的に続けたことによっ
て新が得たものとは茉莉のちょっとおかしな友人というポジション
だけだった。普通の男友達としてそれを眺めるよりなお悪い。茉莉
は新がゲイだと思い込んでいるので、ゲイネタで冗談を言ったこと
がないはずなのに、恋人が出来てからは「新が好きになったら困る
から。なんてね」などと口走ったのだ。

新はこの恋は諦めるべきなのだと知った。しかし感情は理解でき
なかった。ただちよつと、大好きなはずの茉莉を恨みもした。自分
に恋人が出来ないのは相手が茉莉であれそれ以外であれ、原因は茉

莉にあるのだと責任を転嫁させた。

自分の行為がどれだけ愚かしかったのかを知るのに、新は四年以上もかけた。

それから、忘れられるはずがないと知りながらも、新は茉莉のことを高校卒業をきっかけに、実家の引き出しの中の思い出と一緒に忘却の彼方に葬り去ることにした。帰省した時に偶然見かけなければ、日常生活でなんか思い出さない存在として。実を結んだかどうかは別として、とにかく努力はした。

に、なんだかんだ結局は同じところに堂々巡り。

名産も名所もあるようなないような、いまいちぱつとしない地元
の地域を抜け出して新が向かった先は、この国の首都だった。誰だ
って若いうちは国で一番栄えたところへ、都へ行きたいと思うのが
普通だろう。新は大学生としての生活を、彼なりに満喫していた。
生活費を稼ぐために、かなりアルバイトに精を出し、大学の講義は
睡眠学習、ということも少なくなかった。

ある日のことだ。友人に飲み会に誘われるままに全国チェーン店
の居酒屋に向かったら、近い年頃の男女が集まって、今後の個人的
なおつきあいをするに相応しい相手を見定める会だと知った。新は
悲しい初恋を忘れられず、軽く人生にうんざりしていたので、ちょ
っと顔をしかめて友人にどうということだと問いつめようとした。そ
こに朝比奈茉莉が居ると知るまでは。

「わあ、新だ。すごい、久しぶり！ 元気してた？」

かわいらしい女性だ。それでいて美しさも賢さも兼ね備えている。
楽しそうで明朗で明るくて元気そうで、とにかく新がすごく好きな
タイプの女性だ。一年近く会っていなかったけれど、新にはすぐに
分かった。茉莉がそこにいる。でも、少し化粧が濃くなった。かわ
いけれど、あまりにかわいいので困るくらいにかわいい。

「新、何大だっけ？ あたしは敬星^{けいせい}」

知ってます。何故、茉莉は新の進学先を知らなくて、新は茉莉の
進学先を知っているのか。自分と彼女との間に広がる興味の有無に
よる堀を思い知らされた気がした。

「あれ、でも新……」

ゲイじゃなかったっけ？ 茉莉の言葉の続きがすぐに分かった。

ここではらされてしまうのは本意だが、そうか、今がその瞬間か。
新は待った。「違うんだ。おれが好きなのは女の子っていうか君だ」
と愛を告げることのできる瞬間を。しかし恋愛の神さまはそれじゃ

あ面白くないだろうと思っただらしかった。

「……大丈夫、あたし、あのこと黙ってるから」

こそつと耳打ちした時に、茉莉からふわつといいにおいがした。甘ったるい香水みたいなにおいだけれど、新は茉莉から香るにおいならトイレの芳香剤みたいなにおいでも構わなかった。

「茉莉？」

幹事の男が声をかけていい加減に席に着いてアルコール飲料を注文しろ、と命じたので茉莉は新の目の前からは去ってしまった。これは、どういうことだろう？ 新は自分が乙女系男子じゃないと宣言する貴重なチャンスを失ったのだった。

合コンはやんやと楽しげに進行した。楽しくないのは忘れようとしていたのに忘れられない茉莉が未だに意中の相手であると自覚した途端に拒絶されたような思いを味合わされている新だけのようだった。偶然な再会を果たした今、何とか彼女の誤解を解きたいのだが、茉莉はあまりにもかわいすぎた。相変わらず表情の変化はそう多くはないのだが、新の大好きフィルターがかかっているとも会女子の中では一番の美人的なかわいさだった。つまり言い寄る男どもが邪魔で前に進めないのだ。そして新もゲイと断言しなければ女の子がやってくるたぐいの顔をしていたので、周りにまわりつく女子が少なくなかったのだ。

いい感じにアルコールが血中に回り、若者らしい阿呆なテンションで皆は二次会に行こう、と次の目的地をカラオケに定めた。そうして店を出ようとしたところ、遅刻してきた男が一人、駆け込んできた。新は知らぬ顔だが、どうやら幹事とつながりのある人間らしく、遅れたことを詫びて、カラオケには嬉々として同行した。

その男が、女の子たちの人気を奪いとったからだろうか、道中、新は茉莉と話をする機会に恵まれた。

「新は何勉強してるの？」

何故、茉莉は新の専攻を知らないのだろうか。新は茉莉が管理栄養士になりたくて、それを学ぶ道を進んでいると把握しているのに。

新は無視した。

「茉莉、今恋人いないの」

合コンに来るといふことはそういうことだろう。これは、新がよろこんでいい事象なのだろうか。

「まあね。でも、今回は別にいい人探しじゃないよ。ただの人数合わせ。っていうか、知らなかったっていうか」

「おれもだ」

思わず、新は笑ってしまった。思わぬ共通点。うれしかったのだ。茉莉がまだ自分の手の届く場所にいるような気がして、一年も傍に居られなかったことなど忘れてしまった。最初から無理な話だったのだ。茉莉と一緒にいたくて、乙女系男子の仮面までかぶったりした新が彼女を忘れようだなんて、不可能なのだ。こうして会ってしまえば、何年ぶりだろうと前世ぶりだろうと愛おしく思ってしまうに違いない。

茉莉も、目をたわませて笑った。表情筋の利用は少ないけれど、笑顔だと分かる顔で。

「よかった、新は変わってないみたいで」

まるで他の誰かはすっかり様変わりしてしまっただけで衝撃を受けている、みたいな物言いだっただけで新は聞いてみた。

「高校の友達の優子がね……ほら、覚えてる？ 文化祭実行委員とかやってた。もうメールも返ってこなくなっちゃって」

茉莉が悲しそうにしたので、その優子という友人が別れた恋人のごとくつれない素振りで茉莉を無碍に扱ったのだろうと推測できた。新は自分の茉莉になんてことを！ と憤って眉を寄せた。

「じゃあ、おれが代わりにメールするよ。最近してなかったし」

茉莉とメールのやり取りがなくなったのなんて、高校卒業寸前からだっただけで、とにかく何か言っただけでやりたくて新は口を開いていた。

「……ありがとう」

少しはにかんだような声が新の心臓に食い込んだ。これはまずい。早く、例の誤解を解かないと、新はずっと一生女友達（乙女系男子

だと思われてるから)のままかもしれない。再会後すぐ再燃したこの恋は、もはや止められないところまで来てしまった。障害となっているのは新の性癖となっている、ゲイ疑惑だけだ。

「あの、茉莉？」

そこでタイミングを見計らったかのように、合コン男女ご一行様は一軒のカラオケボックスの前にたどり着いた。やれ人数確認だ何時間コースだと店員ともめること数分。二十人は余裕で入れる大部屋に通された。

それでも、カラオケ店でも新は茉莉の隣りに座ることができた。これで例の誤解が誤解だと説明できる。喜々とした新だが、まだアルコールを頼めといいだす幹事に、自分だけは平常心を保とうと断り、若者たちがハイボールだかカクテルだかジンだかサワーだか浮ついた飲み物を頼む間に、まず何と言って祭りに切り出そうと思案した。

誰かが「洋楽を愛するお洒落な自分」を演出しようとして失敗し、音を外してしまっているのが分かった。

高校までは未成年だったために茉莉の酒癖を知らなかった新は、ふとあつたかいものが自分にもたれかかってくるのを知った。普段どおりの顔つきで、頬もほんの少し赤いくらいなのに、茉莉の目はとろんとしていた。

「あー、茉莉、十杯飲むといつもこんななんだよね」

茉莉の大学の友人らしき女性が彼女を起こそうとこころみる。が、茉莉は新にしがみつつかのようにしてもたれかかったままだ。これは、酒で酔っているからの行為なのか、相変わらず茉莉の中では新は乙女系男子な危険のない、無害な存在だと見なされているからなのか、判断はつきかねた。

「茉莉、もう、迷惑でしょ」

「だいじょうぶ、あらただし。言っただけ？ この子とあたしむかしからのしりあいー」

結局茉莉の発言は新の予想したどちらともとれるものだったが、

それでも目まで閉じてしまい、安心しきっているのは確かだった。そして、新は今更ながらに乙女系男子のふりをしている利点について考えた。警戒されていない、やっぱり一緒にいたいと思われる人間、それが新、そう茉莉が思っているなら、このままでもよいのではないか？

茉莉の友人が、まるで彼女の気難しい母親みたいな顔で新を見ていたので、慌てて新は茉莉の目を覚まさせようとした。

「茉莉、起きろ」

「んー」

新は声をひそめた。

「茉莉、おれが誰だか分かってるのかな」

「あらた」

「そう、おれは男だよ」

「……でもあらただし」

それはどういう意味での「あらただし」なのか、はつきりとさせておきたかった。茉莉も、幼なじみ相手にゲイじゃなくとも油断する、ということがあるのかもしれない。となると例の誤解を解いても変わらないことがあるのかもしれないが。いい加減に、してほしい。

もうなんでもいいじゃないか。誤解とか、ゲイとかゲイじゃないとか。茉莉は今恋人募集中のようだし、もうなんでもいいからそこに立候補して。

「まつ」

「……う」

吐く。続いた言葉に、新は一瞬頭の動きを停止させた。慌てた茉莉の友人が、勢いよく新から茉莉を引き剥がした。「はいはいどいてどいて要注意人物が通りますよおおお！」と叫びながらの行動は、手際がよく手馴れた仕事をこなす事務員のようにあざやかだった。きつと、あの友人は茉莉の介抱をこれまでに何度か済ませてきたのだらう。取り残された新は、何もできなかった自分にしょんぼ

りした。

「えー、じゃあ付き合おうよ高坂くん」

「でもオレ、女に興味ないし」

飛び込んできた情報に、嘘であれど同じことを口走った経験のある新は目を見張った。我知らず耳をそばだてた。

「じゃあ男が好きってことおー？」

女の子たちに意味深な瞳を向けられてばかりいた人物は、遅刻してやってきた男で高坂というらしかった。どうやらさっそく人気を集めているようだが、問われて彼はにやっとな笑うのみで、何ともはつきりしたことは言わなかった。

「でもでもー、あたしとならうまくいくかもしれないじゃんー」

「そうかな」

いつもと変わらない男女の会話らしきものに戻ったので、新は意識をあちらへ向けるのをやめた。まさか、あの高坂という男もゲイだったりするのだろうか。まあ、仮面ゲイな自分には関係ないというか全然全く関わりのない話だが。と、茉莉の帰還を目にしてすぐに高坂のことは忘れてしまった。

「茉莉、大丈夫？」

「うーん」

うんと言いたかったらしいが、妙に間延びしていた。とりあえずは茉莉の友人と椅子に座らせて、誰かの歌うミスチルに耳を傾けているかのような時間が過ぎ去った。

「その子、大丈夫？」

ふいに声をかけられたのは、あの高坂という男からだ。この時ばかりは、新と茉莉の友人は茉莉を守りたいという思いで気持ちを一つにした。なんとなく、この高坂という男は気に食わなかった。

「ええ、大丈夫です。お気使いなく」

「そう。こちらでなんとかするから」

ゲイなら新を見つめる時間が長くてもいいものを、茉莉を眺める時間が一番長かったように思われる。新は警戒した。

「なーに警戒してんの。オレ、女に興味ないからさ」

「じゃあなんで合コンなんか来たんです？」

茉莉の友人が、家に連れて来られた娘の婚約者を見る父親のような探る瞳で高坂をねめつける。もつともだ。新も茉莉も合コンとは知らずに来たが、何もそういう場でいちいち「異性に興味がない」と言い続ける必要があるのか疑問だった。

「別にいいじゃん、お堅いな、サエコちゃん」

下の名前を呼ばれて、祭りの友人はむっとしたようだ。反論をしようとして口を開きかけたところ、茉莉がむくりと起き上がった。

「こら。サエコちゃんも新も、失礼でしょ心配してくださった方に。すいませんねえうちの子たちが」

まるで母親が子供にしつけする少し手前みたいな声で、茉莉は高坂に謝った。そんな必要はないだろうに、と新は不満げになる。サエコも同じだ。茉莉は、どうやらすっかりとはいかないが結構お酒の抜けた顔で前を見据えていた。とはいえ言っていることがちよつと酔っ払いじみっていて、普段の彼女とは違っていたが。

「いいよいいよ。茉莉ちゃん、いい子だね」

さりげない調子で高坂は茉莉の手に自分の手を重ねた。新は目をむいた。さすがに、茉莉もそれをいぶかしく思ったのだろう。避けようとして失敗していた。

「オレ、女に興味ないから。安心して？」

出来るか。新が立ち上がったところ、それよりも早くに行動していたサエコによって茉莉は立ち上がらされていた。

「帰ろうっ、茉莉」

乱暴に促されても茉莉は「んー」としか反応を示さず、抵抗も見せないで新も茉莉脱出作戦に参加することにした。というより、主導権を握られてしまったが、新だってサエコと同じことをしようとしていたのだ。

「お先に」

にやにやしている高坂を見ないようにこころがけ、新とサエコと

茉莉はカラオケボックスをあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7474v/>

彼は乙女系男子ではありません。

2011年8月13日03時22分発行